

來り、舊巽殿を博覽場となし、六月十六日より開場し、七月三十一日閉場す。木谷藤十郎・島崎德平・木谷次郎作等三名を博覽會執事とし、中屋寛治・龜田伊右衛門以下三十名をば副執事に命ぜられ、其の事務を幹せしむ。次に同九年二月三日、木谷藤十郎外三十名の者、公園内に於て博物館を設立し、博覽會を取開くべき旨布達有つて、同年四月一日、假開箱式を行ひ、是より巽舊殿をば金澤博物館と稱す。其の後追々備品を増加し、古器新製の機械或は物産、山海の珍品は勿論、書籍畫圖に至るまで取集め、年を逐うて盛大に成りたり。此は古蹟に關からざる事といへども、公園内の名高き館舎なるに依つて載之。

○寶圓寺舊寺地

其の舊地は、今兼六園東方の地にて、後奥村氏舊第地是なり。國事昌披問答に、寶圓寺。利家卿越前府中に被成御座。刻、高瀬の寶圓寺へ御參詣被成、能州御領地に成候節、高瀬の大透長老を越前より御招被成、則能州に寺御建立、其の後加州御領と成、今の奥村伊豫守屋敷に寶圓寺御建、其後只今の所へ御移し被成とあり。三州志來因概覽附錄に、

國事昌披問答に、初め寶圓寺奥村伊豫第の處に建立、其の後の小立野に徙し建つとあり。寶圓寺由來記には、此の事を載せず。它日追考すべしと自註す。平次按するに、貞享二年の由來書には、其の事を記載せずといへども、延寶二年の由來書に左の如く載せたり。

御尋に付書上候。

當寺開山大透和尚者、利家様越前府中御領地之節、高瀬寶圓寺に御參詣被遊、師檀之御契約有之、別而御懇意故、其後能州御領地被成、於七尾一寺御建立、則御家中前波加右衛門先祖御迎に被遊、大透和尚請待被遊候。其以後當國御領地被爲成、只今之奥村伊豫殿屋敷に當寺御建立、其後今之屋敷に相替申由に御座候。寺御建立の年號月日者不明候。併加能兩國御領地之其年、當寺御建候様に申傳候。當寺御建立之筋目并に寺號・山號之由緒者、當御代當寺御再興之節有増記置候。重而於御尋者指上可申候。以上。

寅十二月十三日

寶圓寺 月 肅印

永原 左京殿

篠原 織部殿

右延寶の由來書のみならず。十二冊定書に載せたる寶圓寺來歴書にも、今程の奥村伊豫屋敷に寶圓寺御建立被成、其以後只今之寺屋敷へ御移し被成由。と載せたり。延寶の金澤圖を考ふるに、奥村伊豫舊邸は、今云ふ兼六園の地にて、元和六年に此の地を奥村二代河内守榮明へ賜はりけるよし、三州志來因概覽附錄に載せたり。然れば寶圓寺をば今の地へ移されしも、同年なるべし。此の時寶圓寺を今の地へ移し、其の舊地をば奥村河内へ賜はり、元祿九年に奥村をば石引町下屋敷の地へ移轉命ぜられたり。然るを寶圓寺の舊地は、石引町入口なる奥村氏邸地のよし、寶圓寺に傳承すれど過聞なり。さて寶圓寺記に云ふ。當時開山大透圭徐和尚は、總持瑩山和尚十世法孫也。始住持越之前州高瀬寶圓寺。即七代也。天正元癸酉歲秋八月。利家卿在越前府中之城。歸依高瀬寶圓寺大透和尚。同六年戊寅。利家卿在能州七尾之城。於是建立禪刹。以寶圓爲寺號。及敦請大透和尚爲第一祖。同十一年癸未。利家卿築于城郭於加賀之金澤。即于城之東南之際。再造立寶圓禪寺。自能州之七尾又請大透和尚住持。會依瑞夢之感。城門與寺門相對。山號護國山。

と記載し、そのかみ此の舊地にありし頃は、近く城内の石川門と當寺の山門とを向ひ合はせて建てありしといひ傳へたり。瑞夢の事は、三壺記に、越前府中に在城し給ふ頃、高瀬といふ所に寶圓寺とて古刹あり。利家卿、御父母の位牌を此の寺に勸請せられ、御命日には、折々參詣し給ひ、別して御念頃なり。或時不思議の靈夢を御覽じ、和尚に御物語可被成とて呼びに遣されける處、和尚もふしぎの夢を見、御物語すべしとて府中へ來れる道にて、御使に行き逢ひ、同道して府中へ罷越されたり。利家卿御逢被成、我白鳥と成りて空へ上り、北をさして飛び行きたりと夢に見て候と宣へば、和尚承り、我等も夢中に白鳥三羽とならせ給うて、追々に北をさして飛行被成たるよし見侍れり。此の由申上度と態、鶴を催す處に、御使を被下、途中にて出逢ひ、つくつく按じ見申すに、昔日本武尊東夷を平らげ白鳥と變じて上り給ふに依つて、白鳥大明神と申し奉る。此の御夢も北國の城々を取治め給ふべき瑞夢なり。北陸七ヶ國の城主にならせ給ふものならば、拙僧御菩提所の看坊なれば、御領國一宗の惣祿を預け下されと被申、歸寺せられたり。